第36回　歯科衛生研究会プログラム

日時　平成24年3月7日（水）17時00分～19時30分

会場　日本歯科大学新潟生命歯学部　アイヴイホール

<17:00-17:05>

「開会の辞」

一般講演

座長　三富純子

<17:05-17:15>

1．歯学部学生のブラッシングに関する意識調査
～予測時間と測定時間の比較～

○煤賀美緒[1]、宮崎晶子[2]、土田智子[2]、筒井紀子[2]、原田志保[2]、菊地ひとみ[2]、石井直子[2]、高橋明恵[2]、金子李美[1]、中島瑞恵[1]、山本さやか[1]
（[1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟短期大学）

<17:15-17:25>

2．歯磨剤成分(香味剤)によるブラッシング時間の影響について

○山本さやか[1]、中村直樹[2]、土田智子[2]
（[1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟短期大学）

<17:25-17:35>

3．患者が訴える口腔異常感から口腔乾燥症が疑われた症例への歯科衛生士としてのアプローチ

○中島瑞恵[1]、大森みさき[2]、戸谷収二[3]、片桐美和[4]
（[1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟病院総合診療科、[3]口腔外科・口のかわき治療外来、[4]新潟病院歯科衛生科）

<17:35-17:45>

4．コーヒー、紅茶、緑茶によるレジンの色調変化に関する研究

○田巻麻帆子[1]、高橋正志[1]、海老原　隆[2]、鈴木雅也[3]、新海航一[3]、小菅直樹[1]
（[1]新潟短期大学、[2]新潟病院総合診療科、[3]新潟生命歯学部歯科保存学第二講座）

座長　筒井紀子

<17:45-17:55>

5．上顎大臼歯部にみられた臼旁歯３例の形態と組織構造および歯胚の由来について

○高橋正志[1]、森　和久[2]、又賀　泉[2]
（[1]新潟短期大学、[2]新潟生命歯学部口外学講座）

<17:55-18:05>

6．患者との近接性向上を目的とした社会実験バス運行に関する検討：外来患者に対する来院手段聞き取り調査結果

○石井瑞樹[1]、小松崎明[1]、江面　晃[2]、小野幸絵[2]、三富純子[3]、関本恒夫[4]、五十嵐文雄[5]

（[1]新潟生命歯学部衛生学講座、[2]新潟病院総合診療科、[3]新潟病院歯科衛生科、[4]新潟病院病院長・小児歯科、[5]医科病院病院長・耳鼻咽喉科）

<18:05-18:15>

7．患者との近接性向上を目的とした社会実験バス運行に関する検討：社会実験バスの運行にむけたプロセス分析結果

○小松崎明[1]、石井瑞樹[1]、江面　晃[2]、小野幸絵[2]、三富純子[3]、関本恒夫[4]、五十嵐文雄[5]

（[1]新潟生命歯学部衛生学講座、[2]新潟病院総合診療科、[3]新潟病院歯科衛生科、[4]新潟病院病院長・小児歯科、[5]医科病院病院長・耳鼻咽喉科）

<18:15-18:25>

8．マイクロスコープ診療における歯科衛生士の役割

○菅原佳広[1]、丸山ゆりか[2]、阿部祐三[1]、森田小野花[1]、新井恭子[3]、北島佳代子[3]、五十嵐　勝[3]

（[1]新潟病院総合診療科、[2]新潟短期大学専攻科、[3]新潟生命歯学部歯科保存学第1講座）

座長　白井かおり

<18:25-18:35>

9．全身麻酔下での手術における術前加温の効果について

○吉坂真寿美[1]、齋藤知子[1]、林むつみ[1]、水谷太尊[2]

（[1]日本歯科大学新潟病院看護科、[2]日本歯科大学新潟病院口腔外科）

<18:35-18:45>

10．手袋の着脱演習における手指の汚染状況と演習に対する評価

○藤田浩美[1]、松木奈美[1]、山崎明子[1]

（[1]新潟病院歯科衛生科）

<18:45-18:55>

11．新潟病院歯科衛生科「教育グループ」活動報告

～資質向上を目指した現任教育～

○榎　佳美[1]、小山由美子[1]、佐々木典子[1]、三富純子[1]、近藤敦子[2]

（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科）

座長　松田知子

<18:55-19:05>

12. 平成23年度患者サービス向上グループ活動報告

○松岡恵理子[1]、小林えり子[1]、鈴木明子[1]、片桐美和[1]、三富純子[1]、近藤敦子[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科）

<19:05-19:15>

13. 日本歯科大学新潟病院歯科衛生科　歯科治療技術・材料グループの活動報告
～5年目を迎えるまでの取り組み～

○関根千恵子[1]、内山美幸[1]、白井かおり[1]、相方恭子[1]、澤田佳世[1]、三富純子[1]、近藤敦子[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科）

<19:15-19:25>

14. 鳥屋野小学校『歯の衛生週間』への本学歯科衛生士の支援報告

○風間雅恵[1]、吉富美和[1]、榎　佳美[1]、藤田浩美[1]、原田志保[2]、宮崎晶子[2]、井出千恵子[3]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟短期大学、[3]新潟市立鳥屋野小学校養護教諭）

<19:25-19:30>

「閉会の辞」

歯学部学生のブラッシングに関する意識調査
～予測時間と測定時間の比較～

○煤賀美緒[1)]、宮崎晶子[2)]、土田智子[2)]、
筒井紀子[2)]、原田志保[2)]、菊池ひとみ[2)]、
石井直子[2)]、高橋明恵[2)]、金子李美[1)]、
中島瑞恵[1)]、山本さやか[1)]
1）新潟短期大学専攻科、2）新潟短期大学

【目的】日本歯科大学新潟病院では、初診時の問診表にブラッシングに関する項目を設定している。その中に一回のブラッシングにかかる時間の質問項目があるが、患者の申告のみで実際にどのくらいかかっているのかは臨床では測定を行っていない。そこで本人の申告したブラッシング時間と測定したブラッシング時間を比較するとともに、その差と自身のブラッシング時間に対しての意識の関係性を明らかにすることを目的とし研究を行った。その結果、若干の知見を得たので報告する。

【対象】日本歯科大学新潟生命歯学部　第１学年男性６名、女性５名 計11名（平均年齢　20.5±2.5歳）であり、事前に研究について説明をし、同意を得られた学生のみに実施した。

【方法】最初に P1I により口腔清掃状態を測定し、次に「普段磨いている様に」という指示のもとブラッシングを行わせ、その様子をビデオ撮影した。その後再度 P1I の測定を行い、最後にブラッシングに対する意識について９項目のアンケートを実施した。

【結果、考察】平均申告時間　212.7秒、平均測定時間　190.9秒であった。また自ら申告した時間をどう思うかについて、「短い」　２名(18.2%)、「やや短い」　８名（72.7%）、「やや長い」　１名（9.1%）であった。申告時間と測定時間に１分以上の差があり、測定時間の方が長かった者が４名（36.4%）、短かった者が４名（36.4%）、差がなかった者（１分以内）が３名（27.3%）であった。
以上のことから申告時間と測定時間に差がある者は11名中８名（72.7%）であり、初診時の問診や患者の自己申告のみで正しくブラッシング時間を判断することは難しいことが分かった。また９割が「短い」または「やや短い」と意識しているが、これは今回の対象が歯学部学生であり、口腔に対する意識が高いことが要因として挙げられる。しかしながら「短い」と意識しながらも全体で P1I 値が高かったのは、対象が第１学年で歯科の専門科目が未履修であることが影響したものと思われる。

歯磨剤成分（香味剤）によるブラッシング時間の影響について

新潟短期大学専攻科　山本さやか
新潟短期大学　　中村直樹、土田智子

【目的】
歯磨剤成分の配合の違いによってブラッシング時間が変化するという報告がある。今回、実際にブラッシング時間に影響するか検証するため、清涼感が異なる３種類の歯磨剤によるブラッシング時間の変化を調べたので報告する。
【対象および方法】
1. 被験者
日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生科第 1 学年 12名を対象に実験を行った。
2.実験手順
歯磨剤は、清涼感の異なる種類のもの{歯磨剤Ａ（清涼感　強）、歯磨剤Ｂ（清涼感　中）、歯磨剤Ｃ（清涼感　弱）}を被験者にランダム法を用いて配布した。被験者には日常に行うブラッシングをしてもらい、その様子をビデオにて撮影しブラッシング時間を測定した。同時に、使用感などに関して毎回アンケートを実施した。
【結果】
平均ブラッシング時間は、歯磨剤Ａ 344 秒、歯磨剤Ｂ 373秒、歯磨剤Ｃ 361秒であり、歯磨剤Ａが最もブラッシング時間が短かった。次いで、歯磨剤Ｃ、Ｂの順にブラッシング時間が長くなった。また、全体の平均ブラッシング時間は約6分だった。統計にはフリードマン検定を用いたが、歯磨剤間の有意差は認められなかった。アンケート結果では「香り」という問いに、歯磨剤Ｂの83%が「快」と回答していた。
【考察・結論】
アンケート結果から被験者は普段使用する歯磨剤から「甘い」味を好む傾向にある。また、清涼感の強さを増すごとにブラッシング時間は短くなるとは限らないと考える。
清涼感の強さによってブラッシング時間に差が認められなかった。理由として、市販されている歯磨剤には、様々な工夫されており、どの味を選んでもブラッシング時間に影響がない範囲に配合されていると考える。しかし、最近では特徴のあるフレーバーを使用した歯磨剤や薬理効果を期待したものなど多様な歯磨剤が販売されているため、歯科衛生士は患者が実際に使用している歯磨剤を把握し、指導に持っていく必要があると考える。

患者が訴える口腔異常感から口腔乾燥症が疑われた症例への歯科衛生士としてのアプローチ

新潟短期大学専攻科　○中島瑞恵
新潟病院総合診療科　大森みさき
口腔外科・口のかわき治療外来　戸谷収二
新潟病院歯科衛生科　片桐美和

【緒言】唾液分泌量の低下により口腔内だけでなく全身にも問題が引き起こす事がある。患者は口腔異常感を訴えており口腔精査から、口腔乾燥症が疑われた。その為、口腔外科・口のかわき治療外来(以下口かわき外来とする)と連携し、歯科衛生士(以下DHとする)として口腔乾燥へアプローチした。結果、改善が見られたので、取り組んできた事とその経過を報告する。

【患者】71歳、女性、初診日:H23年6月15日、既往歴:34年前、甲状腺亢進症により甲状腺摘出。現在は甲状腺機能低下症にて内服治療中。主訴:舌の側面、咽頭部にピリピリ感を感じる。

【診査・検査所見】口腔内所見:PCR=35.1%, BI=2.4%, 4mm↑PD=15番LD, 37番LD。動揺なし。視診:舌縁部に発赤。舌背に乾燥した舌苔。舌下部に唾液の細かい泡が少量見られた。唾液分泌検査（口腔内乾燥の判断値）→安静時唾液:1.0ml/15分（1.5ml↓）,サクソンテスト:2.44g/2分（2.0g↓),ガムテスト:20.0ml/10分(10ml↓),口腔水分計:29.5(30以下)・自覚症状の評価VAS→かわき:95mm

【診断】広汎型慢性歯周炎,口腔乾燥症

【治療計画】歯周基本治療（モチベーション、口腔清掃指導、スケーリング、SRP）②口腔外科口のかわき治療外来へ依頼③再評価④SPT

【治療経過】プラークコントロール後、口かわき外来へ依頼し、唾液腺マッサージの指導、含嗽剤を処方された。DHのアプローチとして、唾液腺マッサージの確認、継続を指示。生活指導、咀嚼指導を行った。唾液分泌機能の維持の為に、口のトレーニングを取り入れた。再評価後口かわき外来での経過観察・SPTへ移行した。

【結果】プラークコントロール後、PCRは10%以内、BIは5%以内を維持。唾液分泌検査:サクソンテスト→3.07g/2分・自覚症状の評価VAS：かわき→48mmへ改善した。唾液量の増加とともに、患者の口腔乾燥感の自覚症状が改善した。

【まとめ】患者の主訴や悩みに耳を傾け口腔内全体を見る事で、口腔乾燥症に早期に気付く事ができた。口かわき外来での治療と共に、DHとして唾液腺マッサージの確認や生活指導を行った事で、モチベーションを維持する事が出来、良好な結果に繋がったと考える。患者と積極的に関わる事で、DHの役割、重要性を改めて感じた。患者の年齢を考慮し、今後は、根面う蝕、全身疾患のリスクも考え、アプローチを続けたい。

コーヒー、紅茶、緑茶によるレジンの色調変化に関する研究

○田巻麻帆子[1)]、高橋正志[1)]、海老原　隆[2)]、鈴木雅也[3)]、新海航一[3)]、小菅直樹[1)]
1）新潟短期大学、2）新潟病院総合診療科、3）新潟生命歯学部歯科保存学第二講座

【緒言】　レジンはう蝕や外傷歯などの歯冠修復材料として頻用されており利便性の高い歯科材料ではあるが、経時的に色調変化を示す特性がある。歯科理工学的特性としての変色を除き、色調変化の原因は歯の表面に食品由来の成分が付着することが考えられる。食品中には着色を起こしうる成分が各種含まれているが、日常の食習慣として定着しているコーヒー、紅茶、緑茶に着目し、これらの摂取がレジンの着色原因となるのかを調べることにした。

【方法】　本実験に使用した試料は、光重合型コンポジットレジン（クリアフィル AP-X®、（株）クラレメディカル社製、以下A群　と略す。）と即時重合型レジン（プロビナイス®、（株）松風社製　以下P群と略す。）である。直径12mm、厚さ1.2mmのモールドに填入し硬化させ、計50枚ずつ作製する。各レジンの試料を任意に15枚ずつ抽出し、コーヒー液（無糖ブラック®、（株）ＵＣＣ社製）、紅茶液（午後の紅茶無糖®、（株）キリン社製）、緑茶液（お～いお茶濃いお茶®、（株）伊藤園製）に浸漬する。浸漬前、1週間後から4週間後の毎週、試料の色調を測色計（シェードアイＮＣＣ®、（株）松風社製）にて測色して統計的検討を行い、色差値（ΔE値）を算出する。また、各実験条件の試料から任意に2個ずつ抽出し、乾燥してから写真撮影する。その後白金蒸着して走査型電子顕微鏡(日立社製　S-800型、以下SEMと略す。）にて表面性状を観察する。

【結果および考察】　（1）いずれの浸漬液でも各試料は1週間後には統計学的に有意差がある色調変化が認められた。コーヒーは経時的に明度の低下が継続し、紅茶は一定濃度に着色するとその後はあまり変化しない、緑茶は着色が少なく、時間的蓄積が少ないことがわかった。（2）色差値ではコンポジットレジンに比べて即時重合レジンの色調変化が少ないことがわかった。

（3）SEM像では、コーヒー浸漬群の表面性状は変化が認められなかったが、紅茶および緑茶浸漬群は表面に微粒子が付着しているように観察された。

【結論】　レジンの着色は、色素が表面への付着よりも、材料内部へ浸透の方が影響することが示唆された。

上顎大臼歯部にみられた臼旁歯３例の形態と組織構造および歯胚の由来について

新潟短期大学　　○高橋正志
新潟生命歯学部口外学講座　森　和久、又賀　泉

【目　的】　ヒトの臼旁歯のエナメル質と象牙質の組織構造について検討し、これらの過剰歯を形成した歯胚の由来について考察する。

【材料と方法】　上顎大臼歯部にみられた３例の臼旁歯と、歯周病のために抜去された同一患者の第２および第３大臼歯を使用した。咬頭頂を通る頬舌側方向の研磨標本を作製し、偏光顕微鏡、位相差顕微鏡、蛍光顕微鏡、マイクロラジオグラフィー、およびS-800型走査電顕（日立）で観察した。エナメル質の表面にほぼ平行な研磨面および象牙質の形成面の形態も走査電顕で観察した。

【結　果】　３例の臼旁歯はすべて、第２大臼歯と傾斜埋伏した第３大臼歯の間にみられた。１例の臼旁歯では、頬舌側径が近遠心径よりも大きかったが、他の２例では逆であった。臼旁歯の研磨標本では、エナメル象牙境が屈曲し、第２および第３大臼歯よりも、組織構造が錯乱している歯頸部エナメル質の領域が広かった。臼旁歯のエナメル質は同一患者の第２および第３大臼歯よりもHCl で腐蝕され易く、エナメル小柱の断面形態の歪みが強かった。臼旁歯の象牙質の形成面では、乳歯にみられる管周象牙質の突出がみられなかった。また、石灰化球がみられない、象牙細管の分布が不均一で、直径が不規則な部位がみられた。臼旁歯の歯髄腔の割合は、第２大臼歯よりも少し大きく、第３大臼歯よりも小さかった。同一パターンの４本の蛍光線が、臼旁歯では咬頭頂に相当するエナメル象牙境付近の象牙質に、第２大臼歯では歯頸線よりも少し根尖寄りに観察された。第３大臼歯の歯頸線よりも少し根尖寄りの象牙質にみられた多数の蛍光線は、臼旁歯にも第２大臼歯にも観察されなかった。

【考　察】　３例の臼旁歯の象牙質の形成面の形態から、これらの臼旁歯は乳歯列ではなく、永久歯列に属すると考えられる。同一患者の臼旁歯と第２および第３大臼歯の象牙質の研磨面で観察された蛍光線の位置から、臼旁歯の形成時期が、第２大臼歯よりも約５年遅く、第３大臼歯よりも６年以上早いと考えられるので、この臼旁歯が第２または第３大臼歯の歯胚から完全分離した過剰歯胚によって形成された可能性は低いと推察される。同様に、“臼旁歯が第一生歯に属し、第２および第３大臼歯が第二生歯に属する”というBolk 説は完全に否定されると考えられる。

患者との近接性向上を目的とした社会実験バス運行に関する検討：外来患者に対する来院手段聞き取り調査結果

新潟生命歯学部衛生学講座○石井瑞樹，小松崎明
新潟病院総合診療科　　江面　晃，小野幸絵
新潟病院歯科衛生科　　三富純子
新潟病院病院長・小児歯科　　関本恒夫
医科病院病院長・耳鼻咽喉科　　五十嵐文雄

【目　的】2010 年の世界保健デーでは西太平洋地域において「都市化と健康」がテーマとされ、健康的な都市を目指す取り組みが世界的に普及しつつある。新潟市においても、健幸都市（スマートウェルネスシティ）を標語に政策を推進し、市８大学連携研究事業においても、都市環境と健康増進との関連を検討するため、保健医療資源と住民間の近接性向上を目的とした社会実験を実施することとした。今回は、その事前調査として実施した来院手段聞き取り調査の結果について報告する。

【方　法】社会実験バス運行の基礎資料を得るため、2011 年 12 月および 2012 年１月の任意日に、来院手段など外来患者の通院動向５項目を医科病院待合室で、通院手段について新潟病院各科で聞き取り調査した。

【結　果】医科病院調査での回答者数は 96 名（男 47 名、女 49 名）で、回答者の 40%以上が 60 歳以上となっていた。来院手段（複数回答）の結果は、自家用車（同乗含む）53%、路線バス 26%、徒歩 16%、タクシー9%となっていた。通院時間は 30 分以内が最多で 37%、10 分以内が 30%、１時間以内が 27%となっていた。普段よく利用する交通手段（複数回答）は自家用車とした者が 60%以上と最多だが、バスと回答した者も半数以上あり、タクシーも 20%以上の回答があった。社会実験バス利用の可能性については、毎回利用したいが 20%、必要なときは利用したいが 43%で、利用しないとした者は 28%だった。社会実験バスの行き先の希望（複数回答）については、新潟駅が最多で 45%、古町および万代方面合計が 28%、関屋駅が 27%、その他（県庁・西新潟方面等）が６%となっていた。新潟病院での通院手段聞き取りの結果では、路線バスが 20%を超えていた。

【考　察】本調査の結果から、社会実験バスの運行に対し一定のニーズが存在することが確認できたが、その運行期間や行き先など運行形態については検討を要すると考えられた。特に、徒歩や自転車での通院者が、冬季だけはバスを利用するとの回答もあったことから、積雪など近接性の障害要因の影響等も考慮し、包括的な地域活性化や健康増進、経済性や安全管理等の視点から、今後も継続して分析を要することが示唆された

患者との近接性向上を目的とした社会実験バス運行に関する検討：社会実験バスの運行にむけたプロセス分析結果

新潟生命歯学部衛生学講座○小松崎明，石井瑞樹
新潟病院総合診療科　江面　晃，小野幸絵
新潟病院歯科衛生科　三富純子
新潟病院病院長・小児歯科　関本恒夫
医科病院病院長・耳鼻咽喉科　五十嵐文雄

【目　的】新潟市８大学連携研究事業の一環として社会実験バスを運行したが、その準備・運行過程における問題点を評価し、次年度の円滑な運行ならびに利用者満足度の向上を目的として、アナロジー的視点からのプロセス分析を実施することとした。

【方　法】藤本のプロセスフローチャート１）に準じ、準備・運行過程における情報収集、届出認可、機材・設備、調整・広報、接遇・安全管理等の工程ごとに時系列に沿った工程フローチャートを作成し、プロセス分析を実施した。情報収集過程での資料収集では、新潟市都市交通課および市 HP から資料を得た。関屋駅北口利用者数については、事前および運行期間中に実際に測定した。

また、バス運転手に各便、全バス停ごとに乗降調査を依頼し、その結果から運行便数・ダイヤ・経路の適切性評価を実施し、任意便に調査者が乗車し乗客動向を観察評価した。

【結　果】情報収集工程においては、路線バスの 10 時～14 時の減便による輸送量減少は時間あたり 120 名、西循環減便による間接影響を併せると、最大で 150 名以上の時間輸送力の減少になっていると推計された。関屋駅北口の８時台利用者数は約 80 名だった。機材・設備工程では昭和町２仮設バス停設置位置決定に多くの時間を要し、そこが全工程のボトルネックとなり、事後の調整・広報工程に影響していた。しかし、実際の運行において全中間設置バス停で乗降者が認められたことから、中間バス停自体の設置意義は認められた。また、日ごとに運転手と車両が変更されたため、委託事業者内での申し送り不十分な点も散見され改善を求めた。当初希望した車椅子乗車が可能な中型バスも、新潟市内での手配は事実上不可能な状況も判明し、地域福祉改善の点から市側へも報告した。

【考察】通院環境が悪化する積雪期に運行期間を設定しての運行から、社会環境的な通院障害リスクを可及的に低減する方策について検討でき、住民の保健医療の向上と健康増進に関する基礎資料が得られた。

【文献】１）藤本隆宏：生産マネジメント入門、日本経済新聞社, 2001.

マイクロスコープ診療における歯科衛生士の役割

○菅原佳広[1]，丸山ゆりか[2]，阿部祐三[1]，森田小野花[1]，新井恭子[3]，北島佳代子[3]，五十嵐　勝[3]
[1]総合診療科，[2]短大専攻科，[3]歯科保存学第１講座

マイクロスコープを用いることにより，従来の肉眼で行う診療と比較して診断と処置の確実性が飛躍的に向上する事を実感している．当然のことながら，見えていなかったものが見えるようになることによって得られる効果である．ただし見えていなかったものが見えるようになるというメリットだけが得られたわけではなく，肉眼で行う診療では気にもとめないような不便さを強いられるデメリットも受け入れなくてはならないのも事実である．基本的にマイクロスコープで見ることのできる向きの範囲は狭く，下からのぞき込むような角度では口腔内を見ることができない．そのためミラーテクニックでの診療が中心となり，術者一人では処置をすることができず，アシスタントに依存する割合が大幅に増えることになる．一般的な診療のアシストとマイクロスコープ診療のアシストは大きく異なる部分があり，とても難しいことのように思われがちであるが，着目点を変えるととても修得しやすいのも事実である．術者の視野をリアルタイムでモニターに映し出しているため，アシスタントが術者の視点で視野を確認することができ，手技に応じたアシストを修得する事が容易であると感じている．このことは，歯科衛生士教育を行って行く上で多くの可能性を秘めている分野であると思われる．

一方，昨年 11 月に開催された日本顕微鏡歯科学会第8回学術大会で歯科衛生士シンポジウムが行われた．普段からマイクロスコープを用いた診療を行っている3名の歯科衛生士による発表があり，全員が歯科衛生士の立場でマイクロスコープを使用することの重要性を強調していた．プロービングや歯肉縁下歯石の除去の際にはマイクロスコープ下と手探りで確実性に差があり，歯科医師がマイクロスコープ下で診療しているのに対して歯科衛生士が同じレベルの視野でメインテナンスしていくべきであるとまとめていた．現在の日本には約７万件の歯科医院があり，そのうち約３％がマイクロスコープを導入している．歯科衛生士がマイクロスコープを使用して診療している医院はさらに少ないことは明らかであるが，5 年後，10 年後の歯科医療現場において大きな変化が訪れる可能性は大きいと思われる．将来，求められる歯科衛生士の業務内容にマイクロスコープが含まれてくる動きがあることを報告する．

全身麻酔下での手術における術前加温の効果について

日本歯科大学新潟病院看護科　○吉坂真寿美
齋藤知子　林むつみ
日本歯科大学新潟病院口腔外科　水谷太尊

【はじめに】全身麻酔下での手術は、麻酔薬による体温中枢の機能変化、低い環境温、肌の露出、熱の放散などにより体温の低下が起こりやすい。低体温はシバリングや免疫機能低下などの症状の発生原因となり、患者の術後に影響を及ぼすため、周術期における体温管理は重要である。当院では、平成 10 年２月から電気毛布による術前加温を開始した。そこで、術前加温の実施前後の体温変化や低体温による症状の有無を比較し、術前加温の効果について検討したので報告する。

【方法】１.口腔内の術野に限局した全身麻酔下での手術症例対象とし、術前加温をしない群をＡ群、術前加温をした群をＢ群として比較した。

２.麻酔前投薬前、帰室時、手術室入室時のデータ収集をし①年齢、性別、平均麻酔時間②低体温による症状の発生率③麻酔前投薬前から手術室入室時、手術室入室時から帰室時の体温の変化を検討した。

【結果および考察】年齢・性別・麻酔時間については、特に有意差は認められず、低体温による症状の発生率については、Ａ群 26.8%、Ｂ群 2.2%と明らかな有意差を認めた。体温の変化については、0.6℃以上上昇した割合は、Ａ群 38.3%、Ｂ群 44.5%となり、Ｂ群の方が上昇した割合が高かった。体温が入室時より低下した割合は、Ａ群 51.5%、Ｂ群 38.9%となり、Ｂ群の方が低下する割合が低かった。また、平均体温の推移では麻酔前投薬前から帰室時までの体温の上昇の度合いがＢ群の方が高く、帰室時もＡ群は麻酔前投薬前より低下し、Ｂ群は麻酔前投薬前より高かった。一方、症状が出現していても体温の大きな低下は認められなかった。

全身麻酔をかけると低体温が起こりやすく、一旦低下した体温を上昇させるのは容易なことではない。そのため周術期の体温管理は重要である。そこで麻酔導入前の術前加温により末梢温を上昇させ、中枢温に近づけておくことは再分布性低体温の予防に効果的であると考える。

【まとめ】１.体温の変化については明らかな有意差は認めなかった。２.術前加温により症状出現の頻度に有意差が認められた。３.術前加温を実施することは、周術期の低体温の予防に効果的である。

手袋の着脱演習における手指の汚染状況と演習に対する評価

新潟病院歯科衛生科　○藤田浩美，松木奈美
山崎明子

【目　的】標準予防策は，手指衛生の遵守と適切な個人防護用具（personal protective equipment：PPE）の着用による確実な交差感染対策と職業感染対策の実施を目的とする。感染経路の遮断に有効な手段となる個人防護用具の使用において，手袋は最も頻繁に使用されている。手袋の役割を理解し，適切に使用する必要があることから，平成 23 年度歯科衛生士現任研修の一つとして手袋の着脱演習を行った。演習における手指の汚染状況と演習に対する評価から今後の支援を検討する。

【方　法】日本歯科大学新潟病院の歯科衛生士 29 名を対象として手袋の着脱演習を実施した。評価は，歯科衛生科院内感染防止対策グループの歯科衛生士３名が行ない，演習の手順に従った項目ごとに４段階で評価を行なった。手指の汚染状況の確認には，蛍光クリームと蛍光ライトを利用した。また，演習終了直後に無記名自記式の質問紙による意識調査を行なった。

【結　果】手袋の着脱演習において，手袋を外した後の手指に蛍光クリームの付着を認めなかったのは 29 名中 17 名となった。12 名に付着が認められ，付着部位のほとんどは指先に集中していた。手袋を外す際に手指と汚染面との接触が明白な状態と確認された７名は，練習の必要があると評価された。演習後の意識調査では，手袋の着脱手技について 24 名が「慣れてしまえば問題ない」とし，すでに「実施している」と「今後実施したい」は合わせて 100%となった。

【考　察】手袋の装着は，問題なく実施できると評価された。臨床現場でも適正に装着するには，手袋が設置されている場所の環境・設備を整える必要がある。手袋を外す手順に沿った評価において，外し方に決定的な問題が認められない場合でも，手指が汚染される可能性があると確認された。また，手袋のピンホールが疑われる蛍光クリームの付着も認められた。手袋は手の大きさに適合するサイズを選択し，装着した際にピンホールの有無を確認する必要がある。そして，手袋を外した後には手指衛生が必須なことを認識していなければならない。この演習により，手指衛生から手袋を外すまでの基本的な知識と技術を習得することができたと考えられる。今後は，臨床の場面における適正な手技の実践を確認する方法と，その継続を支援する方策が必要と考える

新潟病院歯科衛生科「教育グループ」活動報告
～資質向上を目指した現任教育～

新潟病院歯科衛生科　○榎佳美　小山由美子
佐々木典子　三富純子
新潟病院総合診療科　近藤敦子

【はじめに】

歯科衛生士の活躍の場は多方面に広がっており、専門スキルアップを目指していく意識の高揚が求められる。私たち教育グループでは、歯科衛生士の資質向上を目的としたグループ活動を行っている。前回は「プリセプターシップを用いた新人教育」の活動報告をしたので、今回は「現任教育」についての活動報告及び研修会を受講した歯科衛生士の意識の変化を報告する。

【活動内容】

現任歯科衛生士教育の目標は「より質の高い医療技術の提供ができるようスキルアップを図る」「知識技術の向上を図り、学生教育に活かす」の２点を掲げ以下の活動を行っている。

①教育グループ会議の開催
②広報誌(PrePre だより)の発行
③現任研修会の企画、開催

【対象】

日本歯科大学新潟病院歯科衛生科歯科衛生士31名(臨時職員を含む)

【方法】

各研修会修了直後に「研修会で得た知識技術が今後の業務に活かせそうか」、年度末に「研修会で得た知識技術が実際の業務に活かされたか」をそれぞれにおいてアンケートを実施した。

【結果】

各研修会修了直後の調査では全ての研修会で対象者の80%以上が「研修会で得た知識技術が今後の業務に活かせそう」と回答したが、年度末の調査では「研修会で得た知識技術が実際の業務に活かせた」とした回答は研修会別で53%～100%と差が開いた。活かせなかった理由として「活かす機会が無かった」との回答が多かった。

【考察】

これまで開催してきた研修会は歯科衛生士が自ら「学びたい」としたテーマであった。またその研修会直後には「今後の業務に活かせそう」という期待が持て、その後「実際の業務に活かせた」という結果となった。このことより、有意義な研修会を開催して来られたと考えられる。

研修会に参加することでスキルアップへの意識の変化がもたらされた。また、今後の業務に活かす事を意識して受講できるチャンスを作っていきたい。その為にも充実した多彩な研修会を継続できるよう努めていきたい。そしてより良い研修会を提供していきたい。

平成23年度患者サービス向上グループ活動報告

新潟病院歯科衛生科　○松岡恵理子、小林えり子
鈴木明子、片桐美和、三富純子
新潟病院総合診療科　近藤敦子

【目　的】

平成23年度の活動目標として、「歯科衛生士として充実したサービスの提供できる職場作りを行い、患者サービスの質的向上を促進する。」を掲げ、行動目標では「診療室の雰囲気作り、個人個人の雰囲気作りを行う。」を目標に、個々の患者さんへの配慮が高まることにより病院全体の総合力アップに繋がることを目的とし活動を行った。

【活動内容】

平成23年度においては以下の内容を行った。

・身だしなみアンケートの実施と報告(5月)
・衛生士への資料配布「おしゃれと身だしなみについて」(6月)
・グループメンバーの院外セミナー参加(6月，7月，開催の講演会　計4回)
・各科セルフチェック表の配布と集計(毎月)
・グループメンバーによる院内ラウンドチェックとフィードバック(年間4回)

【活動結果】

昨年度からの検案事項である「身なり・身だしなみ」について、新潟短期大学実習生登院前の指導要綱を参考に新潟病院に勤務する歯科衛生士の指導者としてふさわしい身だしなみのあり方について再考し、現状調査のためのアンケートを施行した。その結果、髪型・髪色・装飾などにおいて自覚を持って勤務・指導にあたっていることが分かった。また、ラウンドチェックを行うことにより「見られている」という意識を持つことが、患者さん目線をも意識させることから立ち居振る舞い・整理整頓などへ影響を与え良い結果を得ている。

【考察】

今回、歯科衛生士においては概ね良い結果を得られた。「みため」の良し悪しは第一印象の評価に大いに関係することから、医療の現場における安心・信頼・清潔感へと繋がるのではないかと考える。一部診療室においては、受付業務委託により歯科衛生士以外の職種との連携もあり、歯科衛生士のみならず新潟病院に関わるすべてのスタッフへの啓蒙・喚起を行うことで病院全体の総合力アップへと繋がるのではないかと考えられる。私どもは今後も患者サービスの質的向上に貢献できるよう努力したい。

日本歯科大学新潟病院歯科衛生科 歯科治療技術・材料グループの活動報告 ～5年目を迎えるまでの取り組み～

日本歯科大学新潟病院歯科衛生科
○関根千恵子　内山美幸　白井かおり
相方恭子　澤田佳世　三富純子
日本歯科大学新潟病院総合診療科
近藤敦子

【はじめに】
私たち歯科衛生科、歯科治療技術・材料グループは長期目標に『歯科衛生士実習生に対して標準的な診療介助の指導を行う』ことを掲げ、これまで活動を続けてきている。平成24年度を5年目に迎え、これまでの活動を以前の報告内容も交え振り返る。

【活動内容】
1年目（20年度）の短期目標を『歯科材料や診療機器の標準的な管理、操作を実施する』にした。
2年目（21年度）の短期目標は『歯科材料や診療機器の標準的な管理、操作を実施する』と再度見直しを行うように考えた。
3年目（22年度）の短期目標は『当院における標準的な手技で歯科用セメントを練和する、歯科材料の管理・保管を適正に行う』とした。
4年目（23年度）の短期目標は『材料について共通の認識を持って学生指導をする』で活動している。

【活動結果】
1年目は使用器材の調査を各診療科毎に調査し、一覧表にまとめて配布した。また、新潟短期大学の実技実習に参加し、現状把握を行った。
2年目は新潟短期大学実習に歯科衛生科で希望者を募り、積極的に参加させて頂き、臨床実習での指導に役立ててもらった。
3年目は印象材練和のビデオ作製を行った。
4年目の現在は中央材料一元化に伴った動きが活発である中での総合診療科に協力を仰ぎ、基本診療器具調査を行った。また広報だよりの発行を始め、配属科によって知識の偏りが生まれないように図った。
共通して年間行っているのは使用器材の調査（設置環境・期限・保管など）新人歯科衛生士研修への参加だった。

【考　察】
現在、材料は新規材料が増え、管理の見直しをしなければならない。
長期目標達成のため、更なる努力が必要である。

鳥屋野小学校『歯の衛生週間』への本学歯科衛生士の支援報告

新潟病院歯科衛生科　○風間雅恵　吉富美和
榎佳美　藤田浩美
新潟短期大学　原田志保　宮崎晶子
新潟市立鳥屋野小学校養護教諭　井出千恵子

【はじめに】
乳歯から永久歯への生え替わり時期である児童期は歯と口の健康づくりのため、歯科保健指導が特に必要となってくる。歯・口の健康づくりは、児童一人の心がけでは困難であり、保護者、地域、学校、行政機関など児童を取り巻く人々と、歯科医や歯科衛生士など医療機関との連携が必要となってくる。
今回、鳥屋野小学校2学年『歯の衛生週間』における歯科保健指導の要請を受け、本学歯科衛生士が支援したのでここに報告する。

【対象および方法】
対象：新潟市立鳥屋野小学校2学年
5クラス　計133名
方法：講義、実習

【結果】
・歯の大切さ（役割）についてパネルを使用し、指導を行った。
・口腔内観察では、観察用紙を用いて、乳歯と永久歯の色分けを行った。
・ブラッシング指導では、顎模型とパネルを用いて前歯部の磨き方の指導と、うまく磨けない児童には個別指導を行った。

【考察・まとめ】
歯磨きのポイントを書いた、用紙を家に持ち帰ることで、兄弟や保護者にも情報を提供できたと考えられる。口腔内観察では、乳歯と永久歯の区別がつかない児童が多く、2学年には難しい内容であった。そのため、容易に現在の口腔内状況を認識できるような方法を考えることと、ブラッシング指導を多く取り入れた構成にする必要がある。また、観察や指導で、個々に指導を行う時間が必要と考え、26～28人の1クラスで、最低でも4～5人の歯科衛生士が必要と考えられる。
今回は2学年の指導を担当したが、今後は歯肉炎のリスクが高まる高学年の指導支援も行っていきたいと考えている。また、児童にも指導後のアンケートを行い、より良い歯科保健指導を提供できるよう努めていきたい。